研究主題「社会との関わりを多面的に考える児童を育成する指導の工夫
－地図等の資料を活用する学習指導を通して－」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
国分寺市立第一小学校　主任教諭　志村　雅巳

第１　研究のねらい

「生きる力」を支える側面の一つである「確かな学力」には、「基礎的な知識・技能を習得し、それらを活用して、自ら考え、判断し、表現することにより、様々な問題に積極的に対応し、解決する力」がある。しかし、日本青少年研究所が実施した「中学生・高校生の生活と意識」の調査では、「青少年が社会問題や政治問題に参加すべきだ」と考えている中学生は 14.7％であり、「社会のことは複雑で、私が関与したくない」では 53.6％が「そう思う」と回答している。この調査から、様々な問題に主体的に対応し、解決しようとする意識が子供たちに十分に備わっておらず、社会と関わろうとする態度が形成されていないという問題が明らかとなっている。

複雑化する社会情勢の中で社会の一員として活躍するためには、子供たちが主体的に生きていく力を高める必要がある。そのためには、物事を公正に判断し、社会的事象を多面的な見方や考え方をもちながら正しく理解することが重要である。しかし、これまでの指導経験からは、社会的事象を一面的な見方でしか捉えることができない児童の実態が見られた。その原因の一つとして、社会的事象を様々な面から捉えさせる指導が十分ではないことが考えられる。社会的な見方や考え方を養うには地図等の資料の活用が有効であると小学校学習指導要領解説社会編に示されているが、「特定の課題に関する調査（社会）」（国立教育政策研究所 平成 19 年）においては、地図や地球儀を使用した学習機会が不足しているとの報告がなされた。このことから、社会的事象を多面的に捉えさせるための一つの方策として地図等の資料を活用した活動をより充実させていく必要があると考えた。

そこで本研究では、地図等の資料を活用した指導を行うことで、児童が社会的事象の多面性を理解し、社会との関わりを多面的に考えるための学習カリキュラムを開発することとした。

第２　研究仮説

社会的事象の多面性について考えさせたり理解させたりするために地図等の資料を活用した指導を行えば、社会との関わりを多面的に考える力が育つであろう。

第３　研究の内容と方法

１　基礎研究

学習指導要領や地図等の資料を活用する指導に関する先行研究の分析を行った。また、文部科学省や東京都等が実施した学力調査や意識調査を分析した。分析の結果、児童に地図等の活用技能が十分に身に付いていないことや、子供たちが進んで社会参画しようとする意識が低いことが明らかとなった。本研究では「社会との関わり」を以下のように定義付けた。

社会との関わり	⇒	人々が生活している世の中や、人々の営みによって生じた出来事と自分との関わり

２　調査研究

(1) 児童調査（都内公立小学校第５・６学年 926 名）の結果と考察

「社会との関わりに関する意識」と「地図帳の活用技能」の２点について調査した。「社会

との関わりに関する意識」調査から、日本で起こっている出来事と関わりがあると感じている児童は70％を超えているが、世界で起こっている出来事と関わりがあると感じている児童は45.1％であり、世界で起こっている出来事に対しては自分と関わっているという意識が低いことが明らかとなった（図１）。

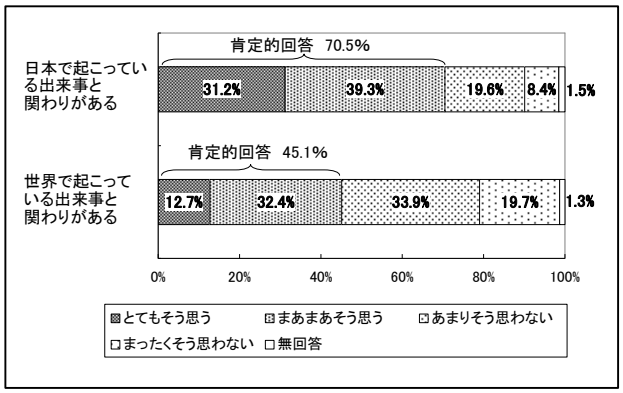

図１　世の中で起こっている出来事との関わり意識

「地図帳の活用技能」調査は、地図帳を用い、問題を解くテスト形式で行った。調査の結果、平均正答率は約55％にとどまり、技能が十分に身に付いていないことが明らかとなった。

(2) 教員調査（都内公立小学校107名）の結果と考察

「地図等の資料を活用した指導」について調査した。調査の結果、地図や地球儀を学習指導において「あまり使わなかった」「使わなかった」と回答した教員は51.2％であり、地図や地球儀を十分に活用していない状況にあると言える。また、地図等の資料の指導に対しての苦手意識を問う設問では、80％の教員が苦手意識があると考えていることが明らかとなった。

３　開発研究

(1) 地図等の資料を活用し、社会との関わりを多面的に考えさせる指導計画の作成

児童に社会的事象がもつ多面性を理解させるには、地図等の資料を効果的に活用する必要がある。しかし、調査研究の結果から地図等の資料の指導に際して、地図等の資料を活用するねらいや場面、使い方が分からず、有効活用できていない状況があると考えられる。

そこで、地図等の資料を有効活用し、児童に社会的事象がもつ多面性について考えさせたり理解させたりすることができるようにするために、地図等の資料を活用する場面と活用するねらい、地図等の資料の指導上の留意点について指導案に明記することとした（表１）。以上のことを指導案に明記することで、教員が「どのような場面で」「どのような資料を使って」「どのようなねらいをもって」指導するのかを理解した上で、指導することができると考えた。

	○主な学習活動 ・予想される児童の反応	☆使用する地図等の資料 ★地図等の資料を使用するねらい	□地図等の資料の指導上の留意点 ・その他の指導上の留意点 【評価規準】（評価方法）
展開	○料理の写真（寿司）を見て使われている食材を考える。 ・まぐろ・えび・鮭　など	☆料理の写真（寿司） ★私たちの食生活は多くの食品によって支えられていることを理解する。	
	○料理に使われていた食材の産地を知り、白地図に表す。 ・外国で獲れた魚が多い。 ・日本産のものは少ない。	☆地図帳、白世界地図、地球儀 ★諸外国の位置や日本との距離を理解する。 ★多くの食材が外国から輸入されていることや、和食でも外国産の食材に頼っていることを理解する。	□地図帳の索引の使い方を確かめる。 □緯度や経度に着目させ、生産される食べ物に特徴があることを理解させる。 □地図と地球儀の違いについて説明し、距離や面積は地球儀を使うと正確に調べられることを確かめる。 □考える視点として、諸外国と日本との位置関係や距離に着目させる。 【知・理】日本で消費される多くの食料は、外国からの輸入に頼っていることが分かっている。（発言・白地図への色塗りや書き込み）

表１　地図等の資料を活用し、社会との関わりを多面的に考えさせる指導計画（一部抜粋）

(2) 「社会との関わりワークシート」の作成

「社会との関わりワークシート」（以下、「シート」という。）は学習を通して考えた社会との関わりを記述し、児童に社会との様々な関わりについて考えさせるものである。学習を通して

考えた社会との関わりをグループ等で共有し、自分の考えとは異なった考えにふれることで社会との関わりについて多角的に考えさせることもできる。また、「シート」を使って学習を振り返る活動を行うことで考えを見つめ直し、深めることができると考える。教員は「シート」の記述から児童の思考の流れや理解度、関心・意欲・態度を把握することができるとともに評価に生かすことが可能となる。なお、「シート」には「学習して考えた私と社会との関わり」「友達の考え」「今日の学習のまとめ」の３点の項目を設定し、単元の「つかむ」及び「調べる」段階で主に使用することとした。

４　検証授業

(1) 検証授業の概要

地図等の資料を活用する指導を行い、社会との関わりを記述する学習を行うことで、社会との関わりを多面的に考える力を育成できることを検証するために、都内公立小学校（２クラス・76 名）において第５学年「これからの食料生産」（全６時間）の授業を実施した。

(2) 「シート」の記述内容の分析

ア　社会との関わりの意識についての分析

「シート」の記述に社会との関わりに関する内容が見られたかを分析した。単元当初には社会との関わりについての考えを記述した児童は約 35％にとどまっていたが、単元の終末になると約 60％の児童が社会との関わりについて記述することができるようになった（図２）。なお、地図等の資料を活用した学習を行ったことにより、Ａ児が記述することができた社会との関わりは以下のとおりである（表２）。

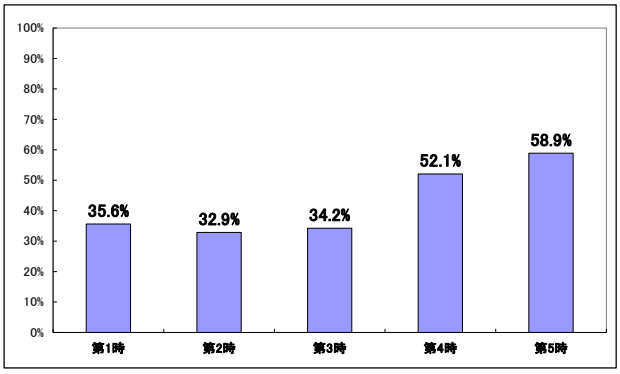

図２　社会との関わりについての記述割合の変化

時間	第１時	第２時	第３時	第４時	第５時
活動内容	日本の食料自給率を知り、日本の食料生産の問題点を考える。	日本の食料自給率が低くなった理由を考える。	食料輸入の増加が与える「良くない影響」について考える。	食料輸入の増加が与える「良い影響」考える。	食料自給率増加の取組を考える。
主に使用した地図等の資料	・白世界地図 ・食料自給率表	・食料自給率の変化を表したグラフ ・昔と今の農地面積や第一次産業従事者割合表	・輸送経路とフードマイレージ ・えびの養殖場及びマングローブ林の面積変化を表した地図	・主に外国から輸入されている食料が印されている世界地図	・「いちばん身近な『食べ物』の話」（農林水産省）
Ａ児の記述（一部抜粋）	たくさんの国に支えてもらいながら私たちの食生活が成り立っている。	もし輸入が止まってしまったら私たちの食事はどうなってしまうのかなと思った。	結局は私たちが地球温暖化などで苦しむことになってしまう。	輸入することで日本では食べられない食べ物を食べることができるので、他の国とつながりができると思った。	生産者のことが分かったり、輸入に頼らない自立した国にしたりできると思った。

表２　Ａ児が記述した社会との関わりの内容

イ　社会との関わりを多面的に考える力についての分析

単元の終末で、「私たちが豊かな暮らしをするためには、どのような食料生産が行われるべきか」について考えさせる活動を行い、そのように考えた根拠として複数の見方から記述することができているかを分析した。分析の結果、「多面的に考えていると評価できる児童」（Ａ群）は 46.6％であり、「一面的に考えていると評価した児童」（Ｂ群）は 21.9％であった。なお、31.5％の児童については、「○○のような食料生産が行われていくとよい。」

というような考えの記述はできていたが､「考えた根拠については記述することができていなかった」（Ｃ群）。それぞれの群について、第１時から第５時までの中で「シート」に社会との関わりが記述できている割合を見てみると、Ａ群 48.2％、Ｂ群 38.7％、Ｃ群 37.3％となった。分析結果から、単元の終末までの学習の中で社会との関わりについて理解することができている児童ほど、多面的に考えられる傾向があることが明らかとなった。

(3) 検証授業前後のアンケート調査の分析

「社会との関わりに関する意識」に関して検証授業前と検証授業後のアンケート調査の結果を比較・分析した。分析の結果、「日本で起こっている出来事と関わりがある」については、肯定的回答が 13.6 ポイント増加した。また、「世界で起こっている出来事と関わりがある」でも肯定的回答は 13.7 ポイント増加した。手だてを講じたことで、社会と関わりをもちながら生活しているという意識が高まったと考えることができる。

「自分と社会は様々な面で関わっている」の設問では、肯定的回答が 90.4％を占め、多くの児童が社会と多面的に関わっているという実感をもつことができたことが明らかとなった。

(4) 学習感想の分析

単元終了後の児童の学習感想から以下のような、問題に対して主体的に関わろうとしたり、解決したりしようとする記述が見られた。（一部抜粋）

- 今の日本の課題は、私たちでもできることで解決できる。
- 僕たちが日本を変えないといけないと授業を受けて分かりました。
- 私に何かできることがないか考えて、できることがあったらしたいです。
- 自分と日本、自分と世界と規模は違うけれど、自分にできることは同じだと分かりました。自分にできる取組があれば自分からしたいと思います。

また、授業中の発言などからも進んで問題解決に取り組もうとする児童の姿を見ることができた。学習を通して、児童が社会との関わりを多面的に考えることができたことで、社会の一員としてどのように社会と関わっていくべきかを考えることができたのではないかと考える。

第４　研究の成果

- 学習指導案に、地図等の資料を使用する場面や使用するねらい、地図等の資料の指導上の留意点を明記することで、単元において資料を活用することにより、どのような力を児童に身に付けさせるのかを明確にしながら指導することができた。
- 「シート」に社会との関わりを記述する活動を積み重ねることで、社会との関わりについての意識を高めることができ、社会との関わりを多面的に考えることにつながった。
- 児童に社会との関わりを考えさせたり、理解させたりする学習を継続して行うことで、身近にある問題に対して積極的に関わろうとしたり、解決したりしようとする意識の向上が見られた。また、食べ物を残さないようにすることや国産の食品を購入するなど、実際に問題解決に向けた取組を実施する行動が見られた。

第５　今後の課題

- 社会的事象の多面性を理解させ、社会との関わりを多面的に考えさせるための地図等の資料の効果的な活用法について研究を重ね、指導を充実させていく必要がある。
- 様々な問題に主体的に関わったり、解決したりしようとする意識を児童にもたせることができたが、問題解決に向けた取組を実際に行うことができるようにする必要がある。